

散佚曲「一夜天神」について

小田 幸子

観阿弥時代には八天神の能Vとよばれる曲が存在していた(『申楽談儀』第22段)。観世座のレパートリーのひとつであったらしい八天神の能Vは、天神―菅原道真―が登場する鬼能だったと考えられる。その八天神の能Vの流れを引く曲に、観世流・喜多流の現行曲八雷電Vと磨曲八菅丞相Vがある。『太平記』卷

十二などにみえる柘榴天神説を素材とした類曲であるが、それとは別に、室町時代には、天神をシテとする鬼能八一夜天神Vなる曲も存在していた。この曲も八天神の能Vの系列に属すると思われるが、完曲は散佚してしまい、一部が謡物として残されるのみである。以下残存する謡物を手掛りとして、散佚した八一

夜天神Vの姿をできるだけ復元してみたい。室町後期の群小猿楽系の型付と推定されている『舞芸六輪之次第』の「鬼之能」の項に次のような記事がある。

一、一夜天神、シテは、前、大口・指貫・

狩衣・すみかぶり也。後は、白き垂髪・悪

尉の面也。冠・指貫・太刀をはく也。(A)

一、菅丞相、シテは童子の躰、後は一夜天

神の出立。悪尉、又は癡見も。はらひの

神二人。例式の鬼の躰。矛を持つ也。口

あきの面よし。脇は僧也。二三人計。(B)

この記事から、室町後期には、鬼能A一夜天神VとA菅丞相Vの二曲が存在したことがわかる。ところが(A・B)の装束付は、現存謡本のA一夜天神V及びA菅丞相Vの内容に合わない点が、いくつか指摘できるのである。

まず(A)についてみると、前シテは貴人出立らしく、後シテは、老齢で恐ろしげな神といったイメージを与える。さて、江戸中期～末期の謡本が伝存するA一夜天神Vは、筑前山中の古社に行きあわせた僧が、老人から、菅公を星天神として勧請した謂れを聞き、後場は神が影向して舞を見せるという内容の神能で、前シテが老人、後シテが舞を舞う神である点で、(A)の装束とは合わない。そこで、かつては現存謡本とは別の、鬼能A一夜天神Vが存

在し、(A)は、その鬼能A一夜天神Vに関する装束付であったと考えたい。この推測は、次に述べる謡物「一夜天神」の存在によってうらづけられるであろう。

江戸中期金春流の『上杉本乱曲集』は、「一夜天神」と題する謡物を三種類収めている。

- (1)恨めしや我身はさらに白雲の鳥羽の古渡に着にけり
- (2)恨みながらも漕ぎ行くはもろとも夜をを明しける
- (3)名にし負ふ明石の月の霞めるは安楽寺にも着にけり

それぞれが小謡として独立しているが、都から安楽寺までの道行文として本来ひと続きのもの認められ、配所に送られる道真の心境を綴った謡物であることも、道真が詠じた和歌や、綱敷天神説を織り込んでいることにより明らかだ。この謡物を「一夜天神」と題するからには、天神が一夜にして何事かをなしたとの話が記されてしかるべきであるが、(C)はその点に全く触れないから、完曲の一部を抜き出したものであろう。また、配所に赴く悲歎を述べる(C)が、衆生済度の神としての天神を描く現存本A一夜天神Vにかつて存在したとはやや考えにくい。そこで、(C)は、現存本とは別のA一夜天神Vの一部であったと考えるのが妥当と思われる。

一方(B)をみると、前シテを童子とする点の不審である。なぜなら、現存本人菅丞相Vの

シテ・ワキ対応の段には「ワキ：姿はそれにてましませども、鬢髪さらに引替えて、眉にも霜の翁とは、何しにならせ給ふらん。シテ思ひのあれば一夜にも白髪となるは理也。…名残惜くも思ひ寝の一夜のうちに白髪の面影も変るなり…」とあり、顔や恰好はかつての菅公そのままなのに、髪が真白であるという異様な姿を、童子で演じるのは無理と思われるからだ。そこでこの場合も、現存本とは別のハ菅丞相Vの存在が予測される。さらに、道真伝説のひとつである一夜白髪説に基づくこの部分は、まさに「一夜天神」と題するにふさわしい内容であり、(A)の貴人出立とも矛盾しない。つまり、右のシテ・ワキ対応の段は本来、散佚曲ハ一夜天神Vにあつたのではないかと疑われるのである。

以上の問題は、『舞芸六輪』の時代には、現存本とは別の鬼能ハ一夜天神Vとハ菅丞相Vが並存していたが、後にハ一夜天神Vは解体し、前場の一部がハ菅丞相Vにとり入れられ道行部分は謡物として残されたと考えられる以外解決のつけようがあるまい。また、現存本の神能ハ一夜天神Vは、江戸中期以降の謡本しか伝存せず、鬼能ハ一夜天神Vの解体以後に作られた曲である可能性が強いと思う。

散佚曲ハ一夜天神Vについてさらに想像を

たくましくすれば、現存本ハ菅丞相Vの「クセ」もかつてはハ一夜天神Vにあつたのではなからうか。現存本ハ菅丞相V前場は、法性坊の僧正を訪れた菅公が、一夜にして白髪となつたいわれを述べ、「クリ・サシ」のあと、配所での心情を語る「クセ」が続く。配所に赴く旅(C)は、シテ・ワキ対応の段の直後にあつたと考えられるから、安楽寺での有様を述べる「クセ」がそのすぐあとに続く形であれば、道真の心境を順次追うことになって、すこぶる都合がいい。つまりハ一夜天神Vから(C)を抜き取った後、新たに「クリ・サシ」が挿入されたと考えるわけだ。道行文の「君が住む宿の梢を：」と「讒臣国を乱し：」の句が「クリ・サシ」にもあるのは、「クリ・サシ」が道行文を参照しつつ作詞されたことを暗示しているのではないか。この想像が許されるなら、ハ一夜天神V前場は、菅公がかつての師の前で、一夜白髪のいわれを説き明かす形で、配所に流され憂き年月を送った心情を長々と語る場面が、聞かせ所のひとつであつたと考えられる。そして、前場のかなりの部分が、現存本ハ菅丞相Vに残っていることになるが、菅公と僧正の再会を描く場合、当然柘榴天神説を取り入れることが予測され、後場も両者の抗争が中心となるであろう。散

佚曲ハ一夜天神Vは、現存本ハ菅丞相Vとよく似た内容の曲だったと言えそうだ。ただし後場は、(A)が後シテの装束しか記さないのが火雷神を引き連れた菅公が、加茂川を氾濫させて僧正の参内を妨害するハ菅丞相Vとは異り、天神一人が出現する形だと思うが、それ以上は明らかでない。

『舞芸六輪』の装束付が、現存謡本と全く合わない曲や、謡本が伝存しない例は他にもいくつかある。室町末期から江戸初期にかけて謡曲の大整理が行われた結果、一部の作品は大幅に改訂され、散佚した曲も多かったと想像される。かつて並存した類曲ハ一夜天神Vとハ菅丞相Vも、この時期に一曲に統合されたのではなからうか。

(文中引用文には適宜漢字を宛てた)